

一 異国の特殊性

A 水事情

マニラ国際空港を出て車で三十分ほどの地域にあるビレッジ(住宅地)内の私にとっては『豪邸』と言いたくなるような物件を契約した。五部屋もある。入居して驚いた。蛇口は何十個所とあるけれども水が出ない。隣の家主に聞いて啞然とした。

「毎日、水を売るトラックが来ますので、何も問題はありません」

五百ガロン(ドラム缶三本弱)の水が九十ペソ(六百円)。まず、その水を蓄えるドラム缶を買う。三本、四千円。なんとなく腹立たしいので安物にした。その後の毎日は洗濯も炊事さえも、ドラム缶の水を汲み出して使う生活となる。雇った二人のメイドにとっては当たり前で暮らし方らしくて、まったく不満顔など見せない。日本でも子供のころ、お勝手に水鸕みづうがあつたので、それを考えれば驚くに当たらない訳だ。だが、それはドラム缶

一

より形も色つやも落ちて着いていた。ドラム缶の水では食事が不味く思える。何日間か外食してみたが『食堂の献立も拙宅と同じ水で調理している』と気付き止めた。

二

貯水タンク設置

隣近所を見ると屋根より高い所に大きなタンクがある。最初のうちは石油でも蓄えているのかなと思っていた。しばらくしてタンクの中身が水と知る。なるほど、タンクを蛇口に直結すれば水が出るはずだ。

日本人は水不足に耐える暮らしに慣れていない。私も鉄骨で櫓ぐらを組みドラム缶十本にも相当する巨大なタンクを載せた。水は重い。頑丈な鉄骨でないと持たない。三十万円かかった。ところが、拙宅の蛇口は水が出ない。タンクを調べたら給水管は隣の家主宅へ延びていた。激怒した私は家主を怒鳴る。

「パイプを切断する」

「そんな暴力的行為をしたら出入国監理局へ告発する。お前は不良外国人として国外追

放になる」

家主の家族だけでなく得体の知れない男たちが私を取り囲む。どちらが暴力的なのだ。こんな連中相手に喧嘩しても腕力では敵わない。翌日、マニラ滞在の長い日本人（E氏）に相談した。E氏はマニラでスキューバダイビング関係の会社を経営している。

「ここは日本ではありません。あなたが造らせた鉄骨櫓だという証明は困難です。おそらく家主は偽領収証を用意しているでしょう。フィリピン人の職人たちは日本人に不利な証言をします。あなたが裁判に持ち込んで勝てる見込みはないと考えられます」

「それじゃ、私は、どうしたらいいんですか」

「あなたが職人の作業を監督してなかったために発生した盗難事件です。たとえば、マニラ空港で一瞬でも目を離せば鞆は盗まれます。鞆に大金が入っていても取り戻せる可能性は、ほとんどゼロです。誰が悪いのでもなく油断した被害者が愚か？ なのです」

日本人は治安音痴だと言われている。発展途上国に住む常識は頭に入っている積もりでいても、どこか間が抜けているのだ。ましてや、私には防衛本能が欠落している。

相談に乗ってくれた日本人が親切を装って日本人被害者を餌食にする図式がマニラには多い。長期在留になると自然に分かる事象だ。私の場合は幸運だった。相談相手の日本人（E氏）とは二十年に近い付き合いとなる。

三

屈辱の解決

四

有能な現地人スタッフをE氏が私に付けてくれた。毎日のように家主宅を訪問するスタッフの一つの解決策に辿り着いた。

「家主に『お願いしまして』水を分けて頂きます。トラックの水を買う経費は折半にします」

私にとって、これほどの屈辱はない。引越そうとしたが一年分の家賃を支払わなければ契約が解消できない仕組みになっていた。戦前の日本と同じで家主を守る法律は充実していても店子の権利など無に近いのだ。一年後の引越しは、水の確認を最優先させなければならぬ。

B 送電停止

八十一歳の母親を入浴させる方法がなくて困惑した。シャワーが庶民のスタイルだ。普通の家屋に浴槽はない。ところが外国人向けの借家には、その造作だけならある。沸かす設備がないのだ。

いろんな日本人に相談してみた。日本人の多くは温水シャワーで暮らしている。常夏のフィリピンでは『湯』に入る習慣が生まれなかったらしい。

A、薪が安いので裏庭にドラム缶を据え付け五右衛門風呂として入浴する。

(八十一歳の母親にも同意してもらえなかった)

B、ドラム缶への出入りが無理なら熱湯を浴槽までメイドが運ぶ。

(何十回もバケツで熱湯を運ぶのは危険)

C、市販されている温水電熱器を浴槽に投げ込む。

D、屋根に太陽熱温水器を設置する。

一年中、強烈な直射日光に恵まれている国だ。D案にしよう。曇雨天時には、C案を併用すればいい。早速、日本の有名メーカー(マニラ支社)に電話した。

「たしかに着想としては結構なのですが、残念ながら日本とは『水』が違い過ぎるので。単に軟水とか硬水とかだけでなく水圧も不安定でして、トラブル発生が目に見えてい

五

六

ます。それに需要も期待薄ですし、弊社としましては、現在のところ申し訳ありませんが、販売計画を検討する予定もないという段階です」

近所で見掛けた屋根上の太陽熱温水器はアメリカ製品だった。『故障してもアフターケアがない』と持ち主が困っていた。価格も法外で私には購入できなかった。

破裂衣する電熱器

それならC案にしよう。

百貨店で千五百ワットの電熱器を三千円で入手した。普通のソケットやコードでは心配なので、それらも強力な物を買う。苦心して一定の深さに吊り下げた電熱器だが、浴槽に入れて十分ほどで小さな爆発音とともに被覆金属管が破裂し配電盤のヒューズが飛んでしまった。

残骸を百貨店へ持参し苦情を言ってみたが、いつもの通りで相手にしてもらえない。お客様は神様じゃないのだ。ガソリンスタンドの従業員などは車が入って来ても、なかなか椅子を立とうとしない。いかにも嫌々そんな顔で車に近付く。

さて百貨店は諦めて別の専門店で似たような電熱器を買ったけれども結果は同じだった。日本製なら破裂しない。私が子供のころ北海道で実際に使っていた。日本の知人に頼んしてみた。しかし『昔は見掛けましたが、もう在庫がないそうです』と知らされた。

そんなとき、E氏のスタッフがドイツ製の電熱器を見つけて来る。これは破裂しなかった。ところが、入浴適温となるまでに六時間も掛かる。それなら電熱器を二本にしてみよう。それでも三時間だ。発泡スチロール板で浴槽に蓋をする。水面にも浮かべた。二時間で何とかなる。

かくして母親の入浴問題は解決したかに見えた。しかし、電力会社の請求書を手にして絶句する羽目になる。一か月、八万円だ。マニラの庶民なら、一か月、五百円くらいが平均らしい。

手作り太陽熱温水器

E氏に初老の江崎さんを紹介された。

「日本では自動車修理屋でした。でも仕事は減る一方でした。同業者は販売に転身しています。修理しか能のない私は廃業しました。資産を処理すれば利息の高いフィリピンな生活できそうなので来比しました。子供たちは独立していますし、女房には先立たれてしまいましたし、日本で孤老を迎える気持ちがなくなりました。もっと切実な動機は高血圧です。一度、倒れています。私の高血圧は寒さが引き金になる質（しな）のものでして、日本の医師にも転地療養を勧められていました。マニラに住んでいれば倒れる心配は少ないようです。それに若い後添いにも恵まれましたので長生きしなければと張り切っています」

傍らの小柄な女性を江崎さんが目を細めて振り返った。なるほど、後添いとしては余りにも若い。もしかしたら二十歳にもなっていないのではなからうか。

江崎さんは太陽熱温水器を作製したと言う。

「毎日、遊んでいても飽きますので、フィリピンの水質・水圧でも故障の起こらない単純構造の物を作ってみました。毎晩、入浴を楽しんでいます。三百リットル容器で条件の

良い日には五十三度を超します。材料費は二万円ほどでした」

「母親の入浴で困っています。拙宅に設置して頂けませんか」

翌日、江崎さんが奥様と来宅した。中古の部品を買い集めて自分で組み立てたジープに乗っている。『せめてガソリン代くらいは受け取って下さい』と言ったけれども固辞された。

「その代わりと申し上げては変ですが、晩酌としてサンミゲールビールが頂けますか。日本語で話しながら飲めますと美味しいのです」

その日の江崎さんは裏庭の日照角度など立地条件を丹念に調査された。

「朝日の具合は申し分ないのですが、せつかくの強い夕陽が不十分です。あのマンゴー樹の枝を切り落としても構わないでしょうか」

ところどころに何個か連なつて拳大の青い果実が吊り下がっている。固い皮を剥くと歯触りの快い果肉が楽しめた。味は日本と言うと青い梅の実に似ている。その枝は正直なところ切りたくなかった。しかし、江崎さんの熱意に応えなければならぬ。マンゴーに対する『惜しいな』という思いを断ち切りたくて承諾した後で話題を変えた。

「それにしても手製のジープとは羨ましいですね」

「フィリピンの車検は日本ほど厳しくないで、こんな悪戯も楽しめます。そのうちに日本人マニアが憧れの的としているベンツのクラシックカーでも乗り回しましょう。『日本人相手の修理屋を始めて下さい』という強い要望もあるのですが、四十年も車の修理をしていますと、もう職業としては気乗りしませんね」

太陽熱温水器が完成

数日後、江崎さんが丹精を込めて製作した太陽熱温水器が完成する。この装置が威力を發揮した。浴槽に溢れる南国フィリピンの恩恵に私は感謝する。かなり冷水で埋めても熱いくらいだった。曇雨天時には電熱器を併用する。電力料金は八万円が、四千元にまで下がった。

一か月後、使用電力量検針員が険しい表情で何やら拙宅のメイドを詰問している。クーラーは何台か、テレビは、冷蔵庫は、ビデオは、ステレオは、扇風機は、実に執拗だったらしい。日本なら質問する馬鹿もいないし、答える間抜けもいないだろう。しかし、メイドは正直に回答している。後で私は激怒したものの『検針員の下品な趣味』と解釈した。

その数日後、電力料金請求書が届く。コンピューターで数字が打ち込まれた紙面にポールのペンで汚い数字が書かれている。四十万円だ。

電力会社出張所の窓口で私は質問する。

「この手書き数字は何ですか」

「それは盗電分の追徴金だ」

「盗電……？」

「そうだ」

「誰が……？」

「お前だ」

「どうやって私に電気が盗める？」

「メータージャンパー（計器の不法な操作）だ」

「何を言うんだ。私は計器なんか触っていない。納得できない。本社へ行って払う」

その足で私は本社へ向かった。

窓口で受付嬢が笑顔で言う。

「この手書き数字は関係ありません。コンピューターの数字だけ支払って下さい」

私は気持ち良く帰宅できた。

その翌朝だった。まだ薄暗い時刻に表が騒がしい。電柱に梯子を掛けた数人の男たちが何か作業をしている。突然、拙宅が停電した。

「盗電追徴金不払いなので送電を停止する」

—

—

言い捨てて作業員たちは引き揚げた。

またまた電力会社へ行き私が抗議する。

奥の机に座っていた男が窓口嬢を押し返して怒鳴る。

「八万円の電力料金が四千円になるなど盗電に決まっている。盗電追徴金未払いだ。送電停止は当然だ」

男は浴槽の仕組みを説明しようとする私の言葉に耳を傾けない。別室に消えてしまった。E氏を私は訪ねる。

「弁護士を依頼して争えば勝てるかも知れませんが、四十万円くらいでは済まなくなります」

「拙宅の家主は南の島で裁判官をしているそうです。この線で何とかありませんか」

「判事が乗り出せば、一日で解決します。家主なら往復航空券の一万円で動いてくれる

でしよつ」

家主が私の電報で駆け付けた。

拙宅の手入れが行き届いている様子に家主は上機嫌だ。

判事が真新しいベンツで電力会社に乗り込む。

その日の午後、拙宅の電気は戻った。

C 商取引ルール

一年中、一流ホテルの屋外プールで泳げる。日本人にとっては羨ましい限りだ。昼夜の気温差が少ないので夜間でもプールに入れる。むしろ、ご婦人がたは強烈な直射日光を避けて夜の遊泳を好んだ。

プール管理室で会員権の案内書をもたらった。終身会員権が五千円。毎月の会費は問題にならないくらい安かった。この程度の金額なら私にも払える。私の申込書を受け取った受付嬢が奥の部屋に消えた。窓口に戻った受付嬢が案内書の金額を私の目の前でボールペンを使って書き直す。二万円。

「五千円の料金表を寄越したのですから、商取引ルールとして私には、その金額で会員権を発行すべきでしょう」

「現行料金は二万円です。会員権をお求めでしたら、この料金を支払って下さい」
窓口嬢は明るい笑顔で私に対応する。

一三

一四

「プール管理責任者を呼んで下さい」

しかし、奥の部屋から出てきた責任者も窓口嬢と同じだった。

「ホテルの社長は誰ですか。どこの部屋ですか」

何度か社長室へ足を運んだが『マラカニアン宮殿大統領府に行きました』とか『アメリカへ出張しています』とか噂うそが明かない。

「ホテル支配人室を教えてください」

その部屋にいる男もプール窓口嬢と変わらなかった。根負けした形で私は（料金表の何倍であろうとも致し方ない）と諦めて再び申し込む。

またまた料金表又更

一週間後、窓口嬢が私の申込書を返して寄越す。

「あの後、終身会員権料金が変更されました。十万円です」

もともとの料金表の二十倍だ。激怒する私に窓口嬢は明るい笑顔を向ける。

E氏オフィスで複数のフィリピン人社員に聞いてみた。

「料金の決定権はホテル側にあります。あなたが怒るのは筋違いです」

新料金決定後に私が申し込んだのなら、その通りだ。しかし、私の申込書を受け取った後で料金変更している。世界の商業常識は『看板に偽りなし』で、お客様に提示した金額を事後変更できない。

(申込金は返させたが、こんなホテルのプール会員権は無料でも断る。突然『会員権は無効』などと通告され兼ねない。あるいは、毎月の会費が百倍にも値上げされるだろう)

大衆食堂も同じ

前項は一流ホテルでの出来事だったが、大衆食堂でも私は同じような経験を何度も重ねている。

壁に貼付してある料金と請求書と金額が違う。私の指摘に従業員が面倒臭そうに答える。

「壁の料金は以前のものです。いまは百八十円でなく二百円です」

一緒に食事したフィリピン人社員たちは黙って払っている。文句を言うのは私だけだ。

「こんなスタイルが世界に通用しますか」

一五

「無然たる表情の私を社員たちは怪訝な顔で眺めている。」

一六

そういえば水道料金でも不可解な請求をされた。三月一日から三月三十一日まで、一か月分、支払っている。ところが、三月十五日から三月三十一日まで、半月分、料金を追加請求するのだ。

「三月三十一日までの水道料金は支払い済みだ。ここに領収証もある」

そう言う私に集金人が抗議する。

「三月十五日に料金が値上げされた。あなたは、その差額を支払ってないじゃないか」

思わず私は絶句した。世界の法理は不遑及だ。法というものは決定日時の前へ溯つて適用できない。一年も前の日付で値上げを決定し、一年間もの料金を追徴するという暴論が罷り通ったら赤字企業など直ちに黒字決算になる。これは文明国なら誰でも知っている生

活の原則だ。集金人に分かつうが分かるまいが構わずに捲し立てて、私は支払いを拒否した。

数日後、拙宅は断水となる。これには参った。水道事務所へ出向いて抗議したが、相手にされない。先方が要求するだけ支払って帰宅した。晩酌のビールが苦い。

二重請求も多い。領収証を大事に保存していなければ二重払いとなる。

それぞれの事務所には原簿があるはずだ。しかし、抗議しても『原簿に記載がない』と言われる。

日本人（外国人）料金という奇妙な仕組みもある。

その地域は救急車料金が三百円なのに母の場合、千五百円だった。質問したら『日本人料金です』と言われた。入院費も日本人は高い。

フィリピン人庶民と同じ生活費で日本人が暮らせるかは疑問である。さまざまなケースで異なるものの教育費・医療費は日本より高い場合もある。

日本人料金は特に医療関係が極端に不公平だ。医師の診療報酬がフィリピン人より日本人の方が明らかに高い。日本人の入院費は驚くほど高く参ってしまう。とてもフィリピンの庶民に支払える金額ではない。

難病の日本人が入院帰国するのは医療水準の問題も考慮しなければならぬもの、どちらかと言えば経費の比重が大きいのではなからうか。フィリピンは保険が不備である。アメリカの保険会社が営業しているけれども保障金額が小さ過ぎる。